氏　名（国籍）　エモデュ　アコバロ　フセイン（バングラデシュ）

学位の種類　博　士（文　学）
学位記番号　博　乙　第　1745　号
学位授与年月日　平成13年6月30日
学位授与の要件　学位規則第4条第2項該当
審査研究科　歴史・人類学研究科

学位論文題目　Social Dynamics in an Immigrant Village in Dhalchar Island, Bangladesh
（バングラディッシュ・ダルチャール島移民村落の社会動態）

主　査	筑波大学教授	博士（文学）	小野澤　正　喜
副　査	筑波大学教授	理学博士	佐　藤　　俊
副　査	筑波大学助教授	博士（文学）	木　村　和　男
副　査	筑波大学講師	博士（文学）	風　間　計　博
副　査	筑波大学教授	理学博士	手　塚　　章

論文の内容の要旨

本論文は，バングラデシュ南岸の島嶼部に位置するダルチャール村を対象として，総計14ヵ月（1997年7月－1997年9月，1998年5月－1999年5月）の現地調査で得た一次資料と文献資料に基づき，移住パターン，資源利用形態，生業，社会構造における動態を論じたものである。

論文の構成は，序論，第1－5章，および終章の全7章からなっている。

序章では，本論文の概要と構成が述べられている。

第1章「理論的背景」では，人類学の社会生態論に関連する理論的仮説群が論じられている。社会生態論はスチュワード，サーリンズ，ラパポートなどの理論が提示されてきたが，その中でもベネットの理論が人と自然との相互関係を理解する上で有効である。しかし，その理論的枠組では社会集団内の動態を十分にはとらえきれていない。本論文はベネットの理論的枠組に依拠しつつ，社会動態論を提示する。更に調査遂行の経緯，調査方法等に関する説明がなされている。

第2章「調査地域の生態学的条件」では，調査地の人口，交通網，職業構成，生態学的条件等調査地の資料が提示されている。調査地ダルチャール村が位置するダルチャール島は，1945年から1950年にかけてメグナ川の河口域に自然に形成された島である。1998年時点での人口は5,573人，世帯数は933である。村民の主な職業は，漁業，農業，小売業等であり，漁業の比重が大である。交通手段は本土と島を結ぶエンジン付ボートと島内の自転車，人力者となっている。

第3章「環境的条件と生業体系」では，調査村をとりまく環境要因と移住・定住のパターン，生業体系とその季節的変動が記述され分析される。この島への移住は1963年に開始された。それはボアラ半島における人口増と貧民の増大を解決するために，政府の政策として促進された。半島の農民が大挙して移住したが，ダルチャール島における漁業収入が増加するのに応じて，元農民層の中で，農耕を保持する者と，漁業とその取引収入に依存する者に分極化した。島民の生業にイリシュ魚（学名　Hilsha ilisha）の漁期（4月－9月），農耕の作付と収穫（2月－10月），魚の乾燥作業（11月－1月），エビの稚魚漁（12月－4月）があり，これらの生業活動が季節ごとに行われる。農業収入は自家消費を支える程度であるが，家計収入の点でイリシュ漁とエビの稚魚漁が突出している。その中でもイリシュ漁は最も多くの資金投資と成人の専門

的知識をもつ労働力を必要とする一方，エビの稚魚漁は，資金投資を必要とせず，特殊な技術も必要としないので子どもや女性によって行われている。

第4章「社会体系の分析」では，まず社会構造と職業構成等の内容が記述される。これらの各セクションは，固有の指導者を核としたネットワークによって柔軟に維持されている。この点に着目し，指導力に焦点をおきつつネットワークの分析を行い，以下の点を解明する。社会構造は経済体系，社会体系，宗教体系の3つの次元の複合的ネットワークによって柔軟に変化しつつ維持される。村民もまた，それらのいずれにも関与している。経済体系における指導力は，漁業資本力にうらづけられている。社会体系における指導力は，リネージの優劣と世帯主の個人的資質に基礎づけられ，宗教体系の指導力はイスラム教の導師の格式に基礎づけられている。このように，各体系における指導力は固有の原理に基礎づけられている。また，各体系内に指導層と従属層が分化している。

その結果，これらの3つの体系を横断するかたちで社会構造が維持され，その全体構造の中に指導層と従属層が明確に認められる。しかし村落の形成以来，農業から漁業へ主たる生業が変化し対外交易による商品経済の浸透，元農民の漁民化とでもいえる職業の流動化が生じている。その結果，社会構造の組み替えが進んでいる。伝統的指導層は，地主や優越リネージの指導者，ならびにイスラム教の指導者から構成されていたが，漁業資本力をもつ者が台頭してきて，新興指導者になってきた。彼らは，伝統的指導層の者と婚姻同盟や経済援助を行うことによって，指導力を発揮するようになっている。

第5章「社会体系の動態」では，生態，経済，政治，文化，宗教の5つの側面におけるネットワーク形成に着目して，社会動態を説明しうる経済，社会，宗教の3次元モデルを提示している。環境要因による影響，生業活動，資源利用，人の移動等社会動態に関する分析が行われている。村民の新たな帰属意識，従属層の伝統的共同体への固執，土地資本から漁業資本への転換，指導者の条件の変化，村外者との接触による村民の行動様式の変化，そして宗教的行事の再活性化と質的変化がトータルな社会変化として整合的に論じられる。

終　章「結論」では，第4章と第5章でおこなった分析を総括している。その結果，生業活動を基礎に形成されている村落社会では，環境と生業，社会構造，外部社会の影響という3つの要因の相互作用によって，経済，社会および宗教の3つの次元が複合的に変化して，新たな指導層が形成されること，また，この社会変化は入植間もない村落社会に特有な現象であることが結論づけられる。

審査の結果の要旨

本論文は先行研究が僅少である状況にもかかわらず，調査地において長期の現地調査を行い，関連分野の諸成果から学びつつバングラデシュの移住村宅の動態を解明しようとした意欲的な作品であり，下記の点を評価できる。

1）長期にわたる現地調査の過程で，参与観察と面接調査によって精度の高い一次資料を収集し，質の高い民族誌として集約した研究であること。

2）2年間の時間間隔をおいて2回にわたる定点調査を行うことによって通時的な社会動態の把握に成功していること。

3）ベネット・モデルの静態論的限界を乗り越えてネットワークの生成過程に着目することによって社会動態的モデルを提示しており理論的貢献として評価できること。

4）移民と移住に伴う集団構造の変動が生態環境と経済構造に適応するかたちで生じ，その過程で既存価値体系の再活性化と組替え，そして階層間と階層内の地位変動のメカニズムが実証的に解明されたこと。

一方，今後の課題も残されている。本論文で提示された3次元モデルの一般的な妥当性を検証するためには，比

較研究による検討が必要とされることである。

本論文はこうした課題を残すとはいえ，生態人類学の分野において多大の学術的貢献をなした作品として学界に大きな地歩を占めるものと認められる。

よって，著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。